

労災遺族 尾根で心通わす

日航ジャンボ機墜落事故の現場「御巢鷹の尾根」では、東日本大震災の津波で七十七銀行女川支店（宮城県女川町）の行員だった長男田村健太さん（当時25）を亡くした父孝行さん（64）と母弘美さん（62）も慰霊登山を行った。企業防災の重要性を訴える人たちの輪が広がり、今年には労働災害遺族2人と共に犠牲者を追悼した。



事故犠牲者の冥福を祈って鐘を響かせた田村孝行さん（左）ら
＝12日午前10時50分ごろ、群馬県上野村

津波で長男犠牲 田村さん今年も

「今年も来たよ」。小雨の中、田村さん夫妻は、墜落事故で亡くなった美谷島健さん（当時9）の慰霊碑に、高校球児だった健太さんの野球ボールを手向けた。美谷島さんは野球が好きで、夏の高校野球を観戦するためジャンボ機に搭乗していた。

静かに手を合わせる田村さん夫妻の横に、今年も2人の遺族が加わった。広告大手電通で長時間労働やパワハラに苦しんで自殺した高橋まつりさん（当時24）の母幸美さん（62）、東芝の子会社の社員で、過労自殺した安部真生さん（当時30）の母宏美さん（64）。講演会などの活動を通じて知り合った縁で夫妻から誘いを受け、初めて慰霊登山に参加した。

広がる共感 出会い力に



山頂の「昇魂の碑」の前で手を合わせる孝行さん（左）ら

幸美さんは山道に並ぶ慰霊碑の前で何度も足を止め、涙ながらに手を合わせ、「亡くなった人の無念と、大切な人を突然失った遺族の思いを想像すると私も共感して涙が出てしまう。悲劇は二度と起こってはいけない」と声を震わせた。

過労で娘自殺 高橋さん初参加

「それぞれの遺族という点が、交流を通じて線で結ばれている。記憶や教訓を後世に伝えて安全な社会をつくり上げていくために、線をつないで輪を広げていくことが重要だ」。孝行さんは強調する。

一つ一つの悲劇が変革のうねりとなり、時に社会を動かしてきた。防災への姿勢や考えが企業の価値を計る尺度になりつつある。

弘美さんは「御巢鷹の現場は、会社がすっかり遺族と向き合ってきたからこそ残されている慰霊の形だと思ふ。企業が遺族と同じ目線に立ち、同じ方向を向いて再発防止に努めることが大切だと思う」と力を込めた。（根元優）

慰霊登山を始めて10年目。田村さん夫妻は、道平